



卒業を迎えて

暖かな日差しに春の訪れを感じる3月、多くの学びの日々を経て、国立療養所長島愛生園附属看護学校を卒業いたしました。

親元を離れ、初めての環境に戸惑いながらも、これから始まる学校生活への期待と不安を胸に入学した日のことを今でも鮮明に覚えています。入学後、ハンセン病に関する授業や入所者様との関わりを通して、その歴史と歩みを知り、大きな衝撃を受けました。同時に、何もできない自分の未熟さを実感しました。そして、倫理観を養いながら「自分たちに何ができるのか」を問い続けることの大切さと責任の重さを学びました。

老年看護学実習では、目が不自由で思いを言葉で表出することが難しい入所者様を受け持たせていただきました。コミュニケーションや援助の方法が分からず戸惑いましたが、看護師の方々には好きな曲を流したり、食事時の環境を整えたりして、落ち着いて食事に向かえるよう工夫されていました。言葉で思いを聴けなくても、その方の思い出や好み、生活背景といった個別性を大切にする関わりが、その人らしさを守り生活の質を支える看護につながるのだと学びました。この経験から、尊厳を守りながらその人らしい生活を支える看護を実践していきたいと考えるようになりました。

先生方や後輩に支えられながら過ごした学生生活は、私にとってかけがえのない時間です。

4月からは新たな場所で看護師として歩み始めます。不安もありますが、本校で学んだことに誇りを持ち、患者様一人ひとりに寄り添う看護を実践していきたいと考えています。

